



Title	東北アジアの諸言語を中心とする証拠性に関する対照研究
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 12, 113-145
Issue Date	2022-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/84899
Type	bulletin (article)
File Information	10_Kazama.pdf



[Instructions for use](#)

東北アジアの諸言語を中心とする証拠性に関する対照研究

風間 伸次郎
(東京外国語大学)

キーワード：間接証拠性、アルタイ諸言語、日本語諸方言、完了アスペクト、存在動詞

0. はじめに

同じ言語の記述であっても、しばしば記述によって、どの形式を証拠性 (evidentiality) の形式とするかが異なっていることがある。一方、証拠性と (少なくとも) 関連が深いと思われる形式を別の文法カテゴリーのもとで扱っていることも少なくない。近年、証拠性に関する研究は多く、研究は進展しつつある。したがって先行研究に照らして、東北アジアの地域の証拠性の形式の特性を再検討する必要がある。本稿の目的はこうした状況のもと、下記の対象言語に関して、(特に間接) 証拠性と関連すると考えられる形式を広く扱い、東北アジアの地域の言語における「証拠性」の意味範囲や特徴、他の文法カテゴリーとの関係を対照的な観点から再考し、俯瞰するものである。その際には、特に存在動詞／コピュラ動詞による完了 (perfect) アスペクト起源であることと、1 人称主語に対する人称制限のあることを軸に、間接証拠性の再考を行う。

本稿では以下の言語を扱う：トルコ語 (チュルク諸語)、ハルハ・モンゴル語 (モンゴル諸語、以下では単に「モンゴル語」とする)、ナーナイ語 (ツングース諸語)、朝鮮語、日本語古文、日本語種子島方言、日本語東北方言、日本語長野方言・静岡方言、日本語近畿方言、北琉球語、南琉球語、現代日本語 (標準語)。トルコ語を除き地域的には東北アジアの言語である。トルコ語は地理的にみて東北アジアの言語とは言えないが、地理的にも東北アジアまで分布しているチュルク諸語がいわゆるアルタイ諸言語の一派を構成しており、証拠性についても古くからよく研究されているため、トルコ語も扱うものとした。

結論としては、[1] 通時的には、東北アジアの言語で多くの場合に、証拠性の形式が動詞複合体の前の方で完了アスペクトから発生し、テンスを兼ねる形式として十全に発達し、その後動詞複合体の後ろに位置する付属語として個々のモダリティの意味に特化したものへ分化した、という変遷についての仮説を示す。[2] 間接証拠性を基本的に「[事態実現時点] における〈一観察〉と [発話時点] における〈認識〉の組み合わせ」として捉えることを提案する。さらにこうした検証の過程で、これまで証拠性としては扱われてこなかった言語の現象についても、それが証拠性としての側面を持っていることを指摘する。

なお本稿が扱う形式には、例えば英語における *reportedly* 「伝えられるところによれば」のような語彙的な要素は含まず、動詞につく接辞や小辞、補助動詞など、何らかの文法化が認められる要素のみを扱うこととする。

1. 先行研究

なお先行研究の収集や整理に関しては、岸田 (2015) をおおいに参考にした。

1. 1. 証拠性の下位分類と具体的機能

Willett (1988) は証拠性を次のように分類している (太字は筆者による)。

I. Direct evidence (Attested)

visual
auditory
other sensory

II. Indirect evidence

reported
hearsay (second hand)
folklore (third hand)
inferring
(inference from) **results**
(inference from) **reasoning**

したがって一般に間接証拠性としては引用 (hearsay)、民話 (folklore)、結果からの推定 (inference from results)、何らかの理由による推定 (inference from reasoning) などの形式が取り扱われていることがわかる。

1. 2. 証拠性と他の文法カテゴリーとの関連

証拠性と他の文法カテゴリーの関係 (異なっている / 隣接している / 重なっている、などとする) を論じた先行研究は多く存在する。まず完了アスペクトと間接証拠性の関係については、研究史を含め Lau and Rooryck (2017) に詳しい記述がある。認識モダリティ (epistemic modality) と間接証拠性の関係を直接扱った論考には de Haan (2001a) がある。意外性 (mirativity) と間接証拠性の関係については、DeLancy (2001) と Aikhenvald (2004) の時代からの議論があるが、近年でも Hill (2012) と Hengeveld and Olbertz (2012) の間で対立する主張がなされている。自己性 (egophoricity) と証拠性の関係については例えば Widmer and Zúñiga (2017)、情報管理¹ (engagement) と証拠性の関係については例えば Bergqvist and Kittilä (eds.) (2020) があり、ダイクシス (deixis) と証拠性の関係については例えば de Haan (2001b) があり、このように証拠性とさまざまな他の文法カテゴリーとの間の関係が問題にされている。証拠性と他の文法カテゴリーの関係全般を扱ったものには Forker (2018) がある。

筆者の力量不足はもとより紙幅の都合もあり、ここにこれら多数の研究における議論を全て過不足なく整理することはできない。ごく簡単にカテゴリー間の関係を上記の順に整理しておく次のようになるだろう。

・完了アスペクトと間接証拠性：完了アスペクトはその行為の結果状態を述べるため、**結果からの推定**を示す場合の間接証拠性との関連はきわめて深い。もっとも強力な仮説は完了もしくは結果アスペクト (perfects or resultative aspect) と間接証拠性の (通時的) つながりを示唆するものである (Forker (2018: 130))。例えば「金魚が死んでいる」という日本語の文は (話者がそれが死んだ瞬間を観察していなくとも) ある過ぎ去った時点で「金魚が死んだ」ことを含意している (寺村 (1984: 135) 参照)。

¹ Engagement の訳語である「情報管理」は筆者による暫定的な訳語である。査読の方からご意見をいただいたが、直訳ではないものの「情報のなわ張り」(神尾 (1990) 参照) に相当する範疇であると考えられることができる。

・認識モダリティと間接証拠性：間接証拠性のうち**推定**は当然のことながら認識モダリティとの関連が深いと考えられている (de Haan (2001a: 201))。「推定」は認識モダリティの一種としてモダリティ²の体系の中に位置づけることもできるためである (Palmer (1986:51))。

・意外性と間接証拠性：間接証拠性のうち**結果からの推定**によるものは、話者がその行為／状態の開始限界を直接に経験せず、結果のみを直接に経験して発話するため、さらに「開始限界を直接に経験していない」ということが強く意識されれば、意外性の意味を実現する。証拠性と意外性の共通起源として考えられるのは結果相のアスペクトである (Hengeveld and Olbertz (2012: 498))。日本語の古文で満月を見て「今宵は十五夜なりけり」という場合には、「(今まで気づいていなかったが) 今日十五夜だったのだ」という意外性の表現となる。

・自己性³と間接証拠性：話者自身の行為であれば、その話者は行為の開始限界から行為の全体を直接に知覚し把握しているのがふつうであり、酩酊状態などで意識を失っていない限り直接証拠性の形式で示されるはずである。そのため特に間接証拠性の形式は 1 人称の行為に使うことができないという人称制限を伴い、もし用いれば無意志の行為などの解釈となる (first person effect, Forker (2018: 135), Aikhenvald (2018: 24-27) も参照)。例えば日本語で「私は朝御飯を食べたようだ」という文は、認知症や記憶喪失といった状況がなければふつう発話されない。

・情報管理と証拠性：情報管理とは、特に聞き手が話し手の持つ情報を共有しているか／注意を向けているかについて、話し手がそれを判断して標示する文法形式であり、その違いが証拠性の形式によって表現されることがある。この例については 3.11.1. の註 15 で後述する。

・ダイクシスと証拠性：指示詞や時制標識など、ダイクティックな形式が視覚による直接証拠性の標識として用いられる言語があり、直示と証拠性には関連があるとされている。De Haan はいくつもの研究で証拠性をダイクシスの観念と関係づけている (De Haan (2001a: 5))。Narrog and Yang (2018: 722) では日本語において引用が証拠性とみなせない理由として、証拠性が常に話し手の視点を通して情報を提示している (すなわち *deictic realignment* が常にある) のに対し、引用はそうでない、という点を指摘している。

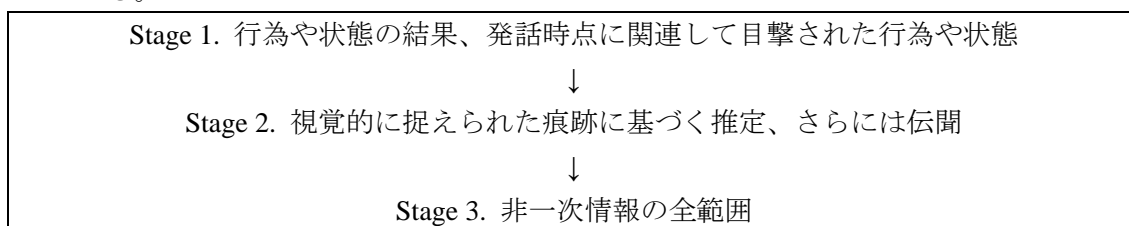
なかでも完了アスペクトと間接証拠性の関連は深い。Aikhenvald (2004: 38) によれば、非一次情報 (間接証拠性) の形式は、本当に証拠性の意味だけであるのか、別の文法カテゴリーからの証拠性への拡張であるのか、分析する上で曖昧なことがあるという。ユーラシアの言語の多くは全範囲の非一次情報の意味を持つ「証拠性完了」として記述される形式を有しており、西アメリカの言語においても非一次情報証拠性の意味は完了形にさかのぼる一連の形式によって表現されるという。Aikhenvald (2004: 279) によれば、バルカンのス

² de Haan (2001a) はモダリティの定義に関して、Palmer (1986: 51) による以下の定義に従っている。すなわち、認識モダリティを4つに分類し、その共通点を “the indication by the speaker of his (lack of) commitment to the truth of the proposition being expressed.” とするものである。

³ 本稿での「自己性 (egophoricity)」の定義は “a binary grammatical category that marks one’s access to mental states as privileged or non-privileged” (Widmer and Zúñiga (2017: 420)) に拠る。

ラヴ諸語、アルバニア語では本来の過去形を用いた証拠性方策が発達し、チュルク諸語、その近隣のイラン諸語、フィン・ウゴル諸語（コミ語、マリ語、北ハンティ語）での非一次情報の証拠性は先行・完了形から生じ、ダルグワ語・アルチ語（北東コーカサス）でも複合結果構文（完了副動詞＋繫辞）から生じ、クリー語・モンタニェ語・ナスカビ語などのアルゴンキン語族の言語でも祖語の完了に由来するという。

Aikhenvald (2004: 279) ではこうした間接証拠性の発展のプロセスを次のような図にまとめている。



1.3. (間接) 証拠性の素材 (Source) となる形式とその分布

De Haan (2005) が調査した 418 言語のうち文化化した証拠性の形式を持つ言語は 239 で、そのコード化において用いられる形態的手法でもっとも多いのは動詞的接辞もしくは接語 (131 言語)、次いで独立的な小詞 (65 言語)、時制体系の一部 (24 言語)、いくつかの手法の混在 (10 言語)、法的形態素 (7 言語) の順である。時制体系の一部によって証拠性における区別を表す言語のほとんどが、その区別を「**過去時制においてのみ表す**」とし、トルコ語もそうした言語であるとしている。本稿と関連のある言語についてみると、他に時制体系で証拠性を示す言語にはガガウズ語 (チュルク)、サハ語 (チュルク)、サラール語 (チュルク)、エウエンキー語 (ツングース) があがっており、動詞的接辞もしくは接語で示す言語には、カルムイク語 (モンゴル)、朝鮮語、日本語があがっている。ハルハ・モンゴル語はいくつかの手法の混在によるとされている。

Bybee et al. (1994: 97, 67) は次のように述べる。

Thus it appears that the most common source of evidential senses for anteriors⁴ is the resultative sense that develops for anteriors coming from stative verb sources.

In the most common case, the resultative sense is the outcome of the combination of the stative auxiliary, which provides the sense of a present state, and the past and/or passive participle, which signals a dynamic situation which occurred in the past ...

つまり**過去分詞**や**受動分詞**が動作行為自体の実現を示し、**状態述語**が現在の結果状態の認識を示し、**その両者の組み合わせである完了アスペクト形式**が間接証拠性のもっとも一般的な素材であるということになる。

⁴ なお anterior について、Bybee et al. (1994) では “Anteriors (or “Perfects”) ... ‘a past action with current relevance’” (Bybee et al. (1994: 61)) とし、resultative については “A resultative denotes a state that was brought about by some action in the past. This sense is similar to the sense of an anterior,” (Bybee et al. (1994: 63)) としている。(Bybee et al. (1994: 68)) では ‘Resultative to anterior’ の機能変化も提案している。

1.4. 証拠性の体系のタイプとその地理的分布

Aikhenvald (2004) は証拠性を次のように分類している：5種類の2分型体系（A）／5種類の3分型体系（B）／3種類の4分型体系（C）／1種類の5分型体系（D）。チュルク諸語はこのうちA2のNon firsthand versus everything elseのタイプであるとしている（Aikhenvald (2004: 29-31)）。ユーラシアの言語の多くはこのA2かA1（Firsthand and Non-firsthand）であるが、A1での区別は過去時制においてのみ行われることが多く、A2でも非一次情報の証拠性が過去時制においてのみ区別されることがあるとしている。

Aikhenvald (2004: 289) では「中央アジアにおいて、一般にチュルク諸語が証拠性の拡散の「震源地」（epicentre）と考えられている」とし、Aikhenvald (2004: 290) では「小さな証拠性体系を持つやや広い「証拠性の帯⁵（evidentiality belt）」ともいふべき地域特徴がバルカンからコーカサス、中央アジアを経由して、シベリアへと広がっており、証拠性の表示は言語によって、また下位グループによって異なるが、その体系と用法は互いに良く似ている」としている。

1.5. 証拠性と他の類型の特徴との関連

Aikhenvald (2004: 8) は証拠性に他の類型論的特徴との相関はほぼない、としているが、風間 (2020: 24) では、証拠性や認識的モダリティが接辞などに文法化している言語はSOV語順の言語に偏っており、この2つの特徴の間には内的関連性があることを指摘した。Forker (2018: 82) は「通言語的によく記述されているように、証拠性の形態素は接尾辞であることが多く、証拠性を表す接頭辞は稀である」としている。接尾辞型であることとSOV語順を持つことの間には相関があるので（風間 (2020: 18-20)）、証拠性はSOV語順の言語の接尾辞として起きることがもっとも一般的であるということになる。

1.6. 動詞複合体における証拠性の位置

Forker (2018) は動詞複合体における証拠性の位置について、「証拠性接尾辞はほとんどの場合ツェズ語（北東コーカサス）の例のように、特に時制標識と融合しているときに、語幹に直接つくが、証拠性と時制が別々の形態素で表現されている場合、時制は証拠性よりも語幹に近い位置に現れることがある（カヤルディルド語（パマ・ニュンガン語族）、ただし逆の順序も見られる（ユカギール語（孤立）、カリティアナ語（トゥピ語族））」としている。さらに「証拠性形態素は、話者の評価や発話行為類の接辞よりも動詞語幹に近い位置に出現するが、その他のTAM形態素は証拠性接辞よりもさらに動詞語幹に近い位置に出現する」としている。

1.7. 「観察」による間接証拠性の説明

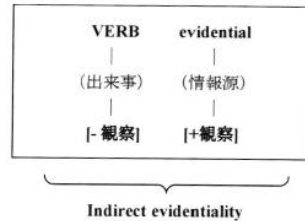
4.5節の結論部分において詳しく述べるが、本稿は北東アジア諸言語の間接証拠性を（話し手により、2つの時点に関わる）「観察」の観点から説明しようとするものである。こう

⁵ 他にユーラシア地域の言語における証拠性についてはさらに Aikhenvald (2004: 291) で “Turning back to Eurasia, evidentials are found in quite a few Tibeto-Burman languages,” とし、さらにインド・アーリア諸語にもあることを述べている。

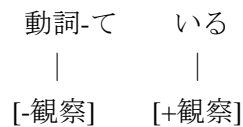
した説明は下記の先行研究より着想を得、これをさらに整理発展させたものである。

3.11.3.節で詳しく述べるが、定延 (2006) や定延・マルチュコフ (2006) では、日本語の「ている」を、『**観察**してみると現在これこれである (これこれのデキゴト情報がある)』ということを表すエビデンシャルである」と定義している (定延 (2006:174)、太字は筆者)。

岸田 (2015) では上記の先行研究を踏まえ、トルコ語、チュルク諸語、東／西／古典アルメニア語、古代日本語、現代日本語の証拠性の形式と機能を検討した上で、「間接的エヴィデンシャルリティにおける意味素性と形態要素の対応」として次のような図を示している：



日本語に関しても下記のような図を提示している：



岸田 (2015) は研究会の発表レジュメであり、これらの図についての明文化された説明はない。ただこれらの図は合成的な述語の構成要素のそれぞれに [±観察] の観点を導入し、その組み合わせとして全体の機能を捉えようとしている点でたいへん示唆的である。

4.5.節で詳述するが、本稿の結論では前項要素について [+観察] のものについても包括的に扱うことを目指し、後項要素についてはより広い概念である「認識」を提案する。

2. 本稿の研究手法と先行研究の問題点

以下本稿では、対象とする諸言語の記述において特に間接証拠性と関連が深いと考えられる諸形式について、次のような情報を収集し整理・分析する：

- <0>動詞複合体における出現位置はどこか (語幹拡張の文法的派生接辞か？／副動詞と補助動詞からなる構造によるものか？／屈折接辞か？／述語の語に後続する付属語か？)。
- <1>素材 (もしくはその起源／語源) は何か、状態述語や存在述語と関係があるか、完了アスペクトの形式と関係があるか。
- <2>その形式が示すのは過去時制のみか。
- <3>先行研究は何の文法カテゴリーの要素として扱っているか。
- <4>意外性の用法はあるか。
- <5>1 人称に対する人称制限はあるか (以下では「1 人称制限」と呼ぶことに統一する)。
- <6>結果からの推定の用法はあるか。
- <7>何らかの理由に基づく推定の用法はあるか。
- <8>伝聞や、民話での使用の用法はあるか。

<9>他者の近過去のことを報告する用法⁶はあるか(以下「近過去報告(用法)」で統一する)。
 <10>回想や思いだしの用法はあるか。

1.1. でみたように、一般に間接証拠性の機能と考えられているのは(下線を付した)<6><7><8>の特徴である。例えば Aikhenvald (ed.) (2018) は分担執筆により 20 の言語の証拠性を扱っているが、そこでは証拠性を「情報源を主な意味とする文法カテゴリー」と定義し(Aikhenvald (2004: 1))、もっぱらこの<6><7><8>の意味を実現する形式を各言語での間接証拠性の形式として取り上げている。しかしそのために上記の<4><5><9><10>のような機能/特徴を示す形式を取り上げていない(取り上げることができなくなっている)。本稿では<4><5><9><10>のような特徴を持つ形式、特に<5>の1人称制限を持つ形式を取り上げ、本稿の対象言語における間接証拠性形式の特徴や歴史的変遷を明らかにすることを目指す。特に日本語の諸方言では、日本語諸方言に残存する古文のケリに由来する諸形式(本稿では「ケリ継承形式」と呼ぶ)を広く取り上げ、その通時的変遷の過程を考察する。

なおなるべく<0>~<10>の順に沿って取り上げるよう配慮したが、元の記述の論理的展開の都合上、若干の前後がある。<0>~<10>の機能/特徴について記述がない言語もある。<0>~<10>の機能/特徴の存在/非存在についての結果は4.3節の表1に整理してあるので、適宜参照されたい。

3. 各言語の間接証拠性の形式の記述に関する整理と分析

3.1. トルコ語

以下の記述は主に Slobin and Aksu (1982), Johanson (2003) に基づく。トルコ語にはその出現に関して相互排他的に対立する過去形 *-DI*⁷ と完了形 *-mİş*⁸ がある。これらは<0>動詞語幹に接続する屈折接辞であり、基本的に主節の文末述語で過去のことに言及するにはこのいずれかの形になる。<1>間接証拠性の形式としての *-mİş* は完了形を起源としている(Johanson (2003: 287-288)、なお Johanson (2003) は完了の意味で *postterminal* という語を用いている)。<2>完了形 *-mİş* は文末では基本的に過去の事態を示す。<3>先行研究はアスペクトと証拠性の形式とみなしている。総じて完了形の根本的な意味は「行為が先に起きて、話者の認識がその後であった」とまとめている先行研究がある(林 (2013: 122) など)。機能的には過去形がデフォルトで(Johanson (2003: 275-276))、完了形には次のような機能や用法、特徴がある:<4>意外性を示す;<6>(痕跡などからの)推定;<7>何らかの理由による推定;<8>伝聞を示し、物語の始まりの部分でも使われる。ただしコピュラ *=DIr* や補助動詞 *ol-*「なる」、*bulun-*「見つける」の前や従属節では、単なる完了の意味を実現する。完

⁶ 「近過去のことを報告する用法」とは、3.4節でみる朝鮮語の *-te-*、3.7.1節でみる宮城県仙台方言の「つけ」にみられる用法である(詳細は当該の節を御覧いただきたい)。単なる過去とは違い、時間的に近過去で、しかも行為全体のプロセスの一部に限定されている点と、話し手の観察による3人称の事態であるため1人称が主語になる文には使われないといった制限がある用法であると整理できる(この点で<5>1人称に対する人称制限の分析項目と若干重複する)。本稿の観点からは、こうした用法の記述が重要であるが、まだ十分にこの用法が定義、認識されている段階ではない。今後、諸言語の記述において、こうした用法およびそれを示す形式がないか、さらに注意を払って行く必要があると考えている。

⁷ 大文字は母音調和、および接続する語幹末音の有声/無声による異形態のあることを示す。

⁸ ここで扱うのはあくまでも屈折接辞の *-mİş* であって、いわゆる Copula particle の推定の後置詞 *=(y)mİş* (林 (2013: 83) 参照) ではないことを注記しておく。

了形には<5>1 人称制限がある。泥酔状態など無意識の行為であった場合や他人からの評価を客観的に言う場合には使える。

Slobin and Aksu (1982) は過去形 -DI と完了形 -mIş の使い分けは、話者の確信があるかないかによるのであって、何らかの証拠があるかないかによるものではないとしている。

<9>近過去報告に特化した形式はなく、間接証拠性の形式にも特にそうした機能は記述されていない。少なくとも奥 (2019: 186) の (20) の文による限り、<10>「思い出し」に過去形 -DI は用いられるが、完了形 -mIş は用いられないようだ。

なお他のチュルク諸語に目を転じると、ウイグル語、ウズベク語、カザフ語、トルクメン語には間接過去に -IBDIR⁹ に代表される形式があるが、これは -(I)b tur-ur、すなわち副動詞に補助動詞 tur-「立つ」が後続する構成の完了表現の形式に由来する (Johanson (2003: 287-288))。

3.2. モンゴル語

以下の記述は主に Janhunen (2012: 244-246) に基づく。テンス・アスペクトの諸形式には証拠性の対立を持つものと、証拠性と関連のないものがある。形動詞形の述語は証拠性と関連がない。定動詞接辞 (<0>屈折接辞である) のうち、durative -nA と terminative -v は証拠性と関連がない。confirmative -IAA と resultative (結果継続) -žee には次のような対立がある (表記¹⁰は筆者のものに改めた、英語訳と説明は Janhunen (2012) のままである)。

- | | |
|------------------------------------|--|
| (1)a. öcigdör boroo or-loo. | (1)b. öcigdör boroo or-žee. |
| (I saw that) it rained yesterday. | (I can see that) it rained yesterday. |
| directly witnessed (“direct past”) | <6><7>indirectly deduced (“indirect past”) |

したがって間接証拠性の形式は -žee であり、これは<1>結果継続の形式であることがわかる。Brosig and Skribnik (2018: 560) によれば、この形式は中世モンゴル語の-JUGU に遡り、さらには *-jU a-QU、すなわち完了 (resultative) 副動詞 -jU に補助動詞として存在動詞/コピュラ動詞 a- の形動詞形 (V-QU) が後続したものに遡るといふ。この推定が正しければ、モンゴル語の間接証拠性の形式も<1>存在動詞に由来するものということになる。<2>-žee はもっぱら過去のできごとのみを示し、上記のように<3>先行研究では証拠性の機能も持つテンス・アスペクトの形式として扱われている。

Kullmann and Tserenpil (1996: 185-186) は -žee について次のように記述している。<2><3>過去テンスの形式である。この形式はもっぱら観察していなかった行為に用いられる。それがこの接辞が 1 人称主語で用いられない理由である。突然もしくは非意志的に起きた行為によくこの接辞が用いられる。<4>すなわち意外性の機能も持つとみることができる。

⁹ Johanson (2003) に倣い、これらの言語における代表形として小型英大文字によるこの表記を用いる。

¹⁰ 表記はキリル文字による正書法からの翻字による。翻字は以下の方式による： a = a, б = b, в = v, г = g, д = d, e = je, ё = jo, ж = ž, з = z, и = i, й = j, к = k, л = l, м = m, н = n, о = o, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ф = f, х = x, ц = c, ч = č, ш = š, ш = šč, ь = ’, ы = y, ь = ’, э = e, ю = ju, я = ja, ø = ö, ү = ü

(2) Minij cag zogs-žee.

I.GEN watch stop-RSL

「(あれ!?) 私の時計が止まっている！」 Kullmann and Tserenpil (1996: 186) (グロス は筆者による)

Janhunen (2012: 245) では、resultative -žee の使用は 2, 3 人称主語がふつうで、<5>1 人称主語は稀である、としている。

上記 (1)b の例文の説明で Janhunen (2012) が述べているように、<6>結果からの推定、<7>理由ありの推定、の用法がある。ただし、他方で<6>結果からの推定、<7>理由ありの推定、のそれぞれの意味を明示的に示す形式 (<6> V-PTCP yum biš biz, <7> V-PTCP ni lavtaj) も別個に存在する (ジンガン (2011: 153-154) の (15), (17) を参照)。これらの形式はいずれも<0>屈折した動詞 (形動詞形) に後続する分析的・語彙的な表現である。<8>伝聞は述語に後続する gene (ge-「言う」の非過去定動詞接辞 -nA が付加した形式に由来する) によって表現される (ジンガン (2011: 154-155) の(20) を参照)。

<8>物語はしばしば間接証拠性の接辞によって始まる (Kullmann and Tserenpil (1996: 185))。

(3) Ert ur'd cag-t emgen, övgön xojor am'dar-č baj-žee.

early before time-DAT old.woman old.man two live-CVB.IPFV be-RSL

「昔、昔、おじいさんとおばあさんの二人が住んでいました。」 Kullmann and Tserenpil (1996: 185) (グロス は筆者による)

少なくとも山田 (2016: 235) [20] の文に見る限り、<10>回想・思い出しに -žee は用いられない。話者 (1989 年 Övürxaŋgaj 生まれ) によれば、-žee の使用は現在やや文語的であるという。他方で<4>発見／意外性には[形動詞形の動詞／名詞+ (jum) bajna]が用いられる。<1>baj-は存在動詞で、-nA は定動詞非過去である。

(4) Öö, elsen#čixer duus-čix-sen baj-na š dee.

INTJ sugar finish-COMPL-PTCP.PFV be-NPST SFP SFP

「あっ、砂糖がなくなっているよ」山田 (2016: 235) [19]

話者によれば、baj-na は<2>過去以外のことにも用いることができ、発見の用法に関しては<5>1 人称制限がある。先行研究はアスペクトの形式としている (Kullmann and Tserenpil (1996: 195))。

<6><7>結果による推定や何らかの理由による推定で用いることができる。

(5) Boroo or(-čix)-son baj-na.

rain enter-COMPL-PTCP.PFV be-NPST

「(地面が濡れているのを見て) 雨が降ったんだな」(話者に確認した作例)

(6) Ter ir(-čix)-sen baj-na.

that come-COMPL-PTCP.PFV be-NPST

「(コートが掛かっているのを見て) 彼は来たんだな」(話者に確認した作例)

他方、<8><9><10>推定や伝聞、物語、近過去報告、回想・思い出しには用いられないという。<5>1 人称主語で全く用いられないわけではなく、現在完了の意味でなら次のような文が言えるという。

(7) Bi ir-čix-sen baj-na.
I come-COMPL-PTCP.PFV be-NPST

「(待ち合わせの場所に着いて掛かってきた電話に答えて) 私は来ているよ」(話者に確認した作例)

3.3. ナーナイ語

ナーナイ語の証拠性については風間 (2005) で扱ったが、本稿の観点から整理し直して示すと下記のようになる。さらに詳しくは風間 (2005) を参照されたい。

下記のように証拠性と関係があり文末述語となり得るのは、もっぱら定動詞形と形動詞形である。<0>形動詞語尾も定動詞語尾も屈折接辞であり、<1>存在動詞や完了形を起源とするものではない。<2>ナーナイ語では、現在、過去のできごとともにもっぱら形動詞形で示されることが多い。直接体験過去も間接体験過去も形動詞形で表現できる。<3>形動詞形・定動詞形が示す文法カテゴリーは、法・テンス・きれつづきとして捉えられている。定動詞形(現在形/過去形)はもっぱら直接に会話している場面で、その前後の時間に行われる話し手もしくは聞き手が主語の行為について用いられる。したがってこれまでの言語とは異なり、むしろ直接証拠性の形式の方が有標であり、使用頻度が低い。Malchukov (2000: 450, 454) は定動詞形を断定形 (affirmative mood もしくは *validational*) とみなし、直接証拠性 (*direct evidential*) だったもの(現在のウデヘ語にみられる)から発展してきたもの¹¹と捉えている。定動詞形は 1/2 人称の現場での行為以外では、[1] 反語(反語は全体が新情報の文だと言われている)および[2] 意外性の文、[3] 引用マーカー (*undə* 「～(だ)という」)の前、で用いられる(これらの文では 3 人称主語が許される)。したがってここでもむしろ直接証拠性の形式の方が、<4>意外性を表現し得るということになる。<5>上記のようにもっぱら話し手もしくは聞き手が主語の行為について用いられるので、主に 1/2 人称の行為でのみ使われるという若干の人称制限がある、ということになる。

<6><7>推定や<8>伝聞も形動詞形の述語で表現できる(ただし当為の表現には語幹拡張派生接辞の -gIIA も用いられ、伝聞には引用標識 (=jA=m un-: un- は動詞「言う」)が用いられる、風間 (2011: 64-66) の(15), (17), (20) を参照)。<9>近過去報告や<10>回想を表現する特別な形式はなく、形動詞形で表現される(風間 (2016: 266) の (20) を参照)。

3.4. 朝鮮語

Song (2020) によれば、朝鮮語の証拠性の標識は次のような体系をなしているという。

¹¹ したがってウデヘ語の段階では、形動詞形の方が間接証拠性としての性格を持っていたということになる。形動詞形は広い意味で一種の名詞化として捉えることも可能であり、Aikhenvald (2004: 117-119) では名詞化を通言語的な間接証拠性の素材として取り上げている。本稿の対象諸言語における名詞化の諸形式についても、さらに注意を払って行く必要があると考えている。

Firsthand: Past Sensory: *-te-*
 Present Sensory: *-ney*
 Non-firsthand: Inferred: *-keyss-*
 Reported: *-tay*

以下ではまずこのうちの間接証拠性 (Non-firsthand) の形式についてみる。

<0> **-keyss-** は語幹拡張の文法的接辞であり、広い用法を持ち、1 人称の意志を示すのにもよく使われる。奈良林 (2012) によれば、<1> **-keyss-** は <-key hɔyess- <-key hɔ-e iss- に由来するという。**-key hɔ-** は「～ように する」、**-e** は副動詞、**iss-** は「いる、ある」を示す動詞であり、ここでも副動詞形に後続する存在動詞起源であることが注目される。過去テンスとも共起する (Ne ecey manhi papp(u)-ass-keyss-ta. 「あなたは昨日はとても忙しかったはずだ」、-Ass-が過去の語幹拡張接辞)。なおそもそも朝鮮語の屈折形式はテンスを示さず、法やきれつづきや待遇法を示す。したがって **-keyss-** 自体は<2>過去時制に縛られない。<3>上記の **-te-**, **-ney**, **-keyss-**, **-tay** は少なくとも Song (2020) をはじめとする先行研究では証拠性の形式とされていることになる。証拠性の先行研究においては当然上記のように<6><7>推定の証拠性の形式として位置づけられているが、より一般的な文法記述、例えば李他 (2004: 180) では<3>モダリティの形式とされている。<4>意外性は主に詠嘆や気づきなどの意味がある終止形語尾 (すなわち屈折形式) の **-ney** によって示される (黒島・崔 (2016: 223-224)、上記の Song (2020) で直接証拠性現在知覚 (First hand, Present Sensory) とされている形式である)。**-keyss-** は上記のように 1 人称の意志を示すので、<5>1 人称制限はない。

<0><1> **-tay** (伝聞) は「言う、する」などの意の動詞 **ha-** に由来するもので、(8)a の分析的な表現が縮約したものである。共時的にいずれの言い方も可能である。したがって元々は屈折した動詞に引用の動詞が後続する分析的な表現であったことがわかる。

(8)a Nayil pi-ka o-n-ta ha-e.
 tomorrow rain-NOM come-PRS-IND say-CVB.PFV

(8)b Nayil pi-ka o-n-tay.
 tomorrow rain-NOM come-PRS-IND.REPORT

「明日は雨が降るそうだ。」 Song (2020: 426) による、グロスとは本稿のものに変えた

<2>過去時制には縛られないが、伝聞であるため 1 人称制限がある。話者 (1978 年生まれ慶尚北道 yeyjen 郡 ywujemyen 出身) によれば、非疑問文では特殊な文脈¹²でもない限り、Ceika ontay. 「私が来るそうだ」などと言うことはできないという。つまり<5>人称制限があると考えられる。油谷他 (編) (1993: 102, 473) をみる限り、**-keyss-**, **-tay** に<10>回想の用法は記述されていない。回想過去にはもっぱら **-ten** が用いられる (油谷他 (編) (1993: 502))。

次に直接証拠性とされている形式のうちの **-te-** についてみる。

<9>近過去報告の機能を担う形式はまさに上記の Song (2020) が直接証拠性過去知覚 (First hand, Past Sensory) としているこの **-te-** である。直接証拠性の形式として位置づけられているものの、機能面でも使用面でもデフォルトの形式ではない点に注意が必要であ

¹² 例えば日本語で意味を示せば「(皮肉っぽく) 私は全く行く気がないというのに、私が来るそうだよ」と言うような文脈での発話である。

る。この形式は<0>語幹拡張の文法的派生接辞であり、先行研究は「単純に時制とするのは難しい大変複雑な機能を遂行している点に留意しなければならない」としている。<1>中期朝鮮語以来のこの形式に特化した論文に河野 (1948) があり、そこでは、-te- は強い 1 人称制限の傾向を伴った直接体験の未完了過去とされている。<3>他の先行研究は主にこの形式を「回想時制」として扱ってきた (李他 (2004: 183))。基本的な機能は話者が発話時以前に直接知覚して知ようになった事実を客観視し伝達することで、これを「非現場性」ということができ、「今ここ」で起きたことには使うことができないという (李他 (2004: 181))。したがって<4>意外性の用法はない。しかし他の言語の間接証拠性の形式のような<5> 1 人称制限があり、夢の中や無意識の行動として話者が自身の行為を客観化して述べる場合でなければ使えないという (李他 (2004: 182))。他方、話者の感情を示す場合には逆に 1 人称主語のみが可能で、2/3 人称主語は許されない (李他 (2004: 182))。その情報を話者が知覚したのが過去のことでさえあれば、述べる事態自体は<2>過去には縛られず、-Ass-te- は過去のできごと、-keyss-te- は未来のできごとを表現する (李他 (2004: 181))。話し手の記憶を基にその再認識を示す点 (つまり近過去報告の用法を示す点) では、むしろ下記の 3.7.1.~3.7.3. でみる日本語の東北方言のケリ継承形式であるツケやツキヤによく似ている。-te- とツケを扱った対照研究も存在する (金・安 (2012))。

「思い出し」には確言を表す終止形語尾 (-Ass)-ci が用いられる (黒島・崔 (2016: 225))。

3.5. 日本語古文

以下の記述は小田 (2015) に基づく。「き」が直接体験過去、「けり」が間接体験過去 (ただし未来を示す例もある (小田 (2015: 154))) を示す。相互排他的に対立する。<0>ともに連用形接続であるので、屈折的な形式とみることができる。<1>「けり」は「来+あり」に遡るとする説がある。「き」が直接体験過去であるということは、中古物語の会話文においてはほぼ例外なくあてはまるという。ただし物語の地の文では直接体験に限らないが、これは発話主体が不明確であるためと考えられる。一方「けり」は機能的にデフォルトの面があり、直接体験過去にも用いられる。<2>上述のように両形式共に過去形であるので、その使用は過去に縛られる。<3>小田 (2015) はテンス・アスペクトの下位範疇である直接経験/間接経験としてこれらの形式を扱っており、トルコ語とも対照している。他方モダリティの下位範疇として証拠性を別に立てており、そこでは「べし」(様相的推定・論理的推定)、<7>「らし」(証拠に基づく推定)、「なり」(聴覚に基づく推定)、「めり」(視覚に基づく推定) などが扱われている (小田 (2015: 177-192))。これらの形式は全て終止形に後続するので、付属語であるが、「き」「けり」には後続しない (小田 (2015: 70))。<5>「めり」には 1 人称制限があるとしている (小田 (2015: 191))。「なり」「めり」には推定の用法があり、「なり」には伝聞の用法がある。

<4><8>「けり」には、[1]結果継続の用法、[2]伝聞、[3]気づき (意外性を含む) の 3 つの用法がある。<5>春日 (1968)[1980: 263] は「けり」は必ずしも自己以外の他者ばかりでなく自己の動作にも用いられるが、その際には客体化した自己の動作として、自己の現存する地点に近づくものを「迎え取る」形において表現するものであるとしている。「自己をも他者として取り扱う態度こそケリの大きな性格である」としている。<6>上代に存在した推定

の「らし」と同じような機能を表すことがあり（降り積みし高嶺のみ雪とけにけり清滝川の水の白波）、これは結果からの推定の機能とみることができる。上述のように<7>証拠に基づく推定には「らし」が用いられる。<8>「けり」は伝承や物語に用いられる。

3.6. 日本語種子島方言

小林 (2004: 491) によれば「ケの類の分布はいわゆる方言東西境界線の東側に偏る¹³が、種子島方言にケルという形が存在し、消滅寸前の状態ながらこれが東側に呼応する西側のケの類の分布ということになる」という。小林 (2004: 509) は東日本のケが共通してもっているのは、発話時現在の自己の記憶を検索すること、すなわち<10>「思い出し」の機能であるという。なお通時的問題だが、江戸時代の日本語では話し手の経験上新しいはずの事柄の思い出しにも使用されていたという（渋谷 (1999) による、次の例も）。これは<9>近過去報告用法とみることができる。

「うきさんなんだァ、モウ夜中だァもし」「いゝにや、今まで咄しごゑがしたつけ」

種子島方言の形式について、以下、小林 (2004: 477-490) の記述による。

<0>述語の終止形に接続する（したがって付属語である）。<1>ケルは、古文のケリの終止形が連体形へ合流した以降の形に対応する（したがって存在動詞起源である）。<2>そのためケル自体はテンス・アスペクトの機能を持たず、先行する終止形の各テンス形式等がその機能を担う（したがって過去には縛られない）。<3>以下に見る諸機能について、小林 (2004) はこれらをムード的意味として扱っている。後ろにはワ、ヤ、ヨ、ローなどの終助詞が接続することもあり、ケラー、ケリヤー、ケロー、ケンローなどの形式でも実現する。<4>ケルは、あることながらに対する話し手の発話時点での認識の成立を標示する（したがってこれを意外性の用法とみることができる）。

(9) ヤッパリ 釣レンジャッタケル。

(10) エー モー サンジジャケラー。

「えー、もう3時なんだなあ（まったく気が付かなかった）。」

<5>人称制限や<6><7>推定の用法については明確な記述が見出されない。

すでに認識が成立していた事態に対しては使用できない。

(11) (家に帰ってから家族に) *キョーワ 釣レンジャッタケラー。

(12) (「おまえは昨日ここへ来たか?」と問われて) *キタケラー。

<8>伝聞の場合にも使用が可能である。

(13) コガン コガンチューテ イワッタケル。「こうこう言われたそうだ。」

<10>回想の用法もある。

(14) イマ オモエバ オイモ (俺も) アントキヤー チカラガ アッタケラー。

¹³ 小林 (2004: 491) には、接続する品詞と用法を考慮に入れた東日本におけるケの類の分布地図（国立国語研究所 (1989-2002) 『方言文法全国地図』第3集 141 図、第4集 186・188 図）のデータを基に作成したものが示されている。

3.7. 日本語東北方言（宮城・岩手・青森）・静岡方言・長野方言

以下、この3方言で扱う形式はいずれも<1>ケリ継承形式である（つまり存在述語起源である）。

3.7.1. 宮城県仙台方言

宮城県仙台市の方言における「つけ」について、以下は小林 (2004) の記述に基づく。<0>終止形に後続する付属語で、<1>ケリ継承形式であり、<2>過去の事態のみを示す。<3>モダリティとして扱われている。<4>意外性や<6><7>推定、<8>伝聞の用法の記述はない。

<5>新しい事柄では1人称制限があり、話者が意志的に行った行為の報告には使えない。

(15) *オレワキョーニジカンモベンキョシタツケヨ。

(16) キョーワ（電車が）スイテタンデスワレタツケヨ。

<9>他方、近い過去の事柄にも使用できる。普遍的事実、習慣、予定の<10>思い出しにも使用できるという。

(17) アイツワキョーニジカンモベンキョシタツケヨ。

<10>標準語と同様に遠い過去の記憶を検索し、思い出したことの標示にも使われる。

(18) アイツワアノコロヨクベンキョーシタツケナー。

3.7.2. 岩手県遠野方言

高田 (2004) は遠野方言の「ケ」が「ある事態を過去に認識したこと」を表す用法を持ち、テンス決定に事態の認識時点に関わることを指摘している。以下の記述は高田 (2004) に基づく。<0>動詞やダに後続する場合は終止形に後続するが、形容詞や動詞の否定形に後続する場合にはタ形と対立し、屈折位置に現れる。<9>伝達文では、話し手自身が目撃した事態を述べる場合に用いられる、すなわち近過去報告がある。

(19) 太郎ア、公園デ {遊ンデルツケ / 遊ンデラツタツケ} ヨ。

（太郎は公園で {今遊んでいる / 遊んでいた} のだが、それを発話時以前に目撃した）

(20) 早池峰山ア、{高ガッタ / 高ガツケ}。

(21) 太郎、昨日ア、学校サ、{行ガネガッタ / 行ガネガツケ}。

<2>示すのはもっぱら過去時制のみである。<3>証拠性に関わることが明言されている（高田 (2004: 107)）。<4>意外性の用法はない。

(22) コノ子、コンナニ {カワイガッタノ / *カワイガツケノ / *カワイガッタツケノ} ！

<5>1人称制限がある。

(23) {オ父サン / *俺}、今晚ア、酒、飲マネガツケヨ。

(24) {アノ人 / *俺}、若イ頃、金、ネガツケヨ。（主語ではない所有者でも人称制限がかかる）

<6><7><8>推定や伝聞の用法は記述されていない。

<10>独り言的な文では、思い出しや回想に用いられ、その場合には1人称制限がない。

(25) {太郎 / 俺}、ソノ頃、ヨグ英会話ノ勉強シタツケ（ナー）。

(26) ソー言エバ、アノ人、{先生ダッタ / 先生ダツケ / 先生ダッタツケ}。

3.7.3. 青森県津軽方言・青森県南部方言

青森県内でも津軽方言と南部方言の差が大きいことは知られているが、間接証拠性の形式の機能に関しては大きな差がないものとみて、本稿では一緒に取り扱う。

<1>吉田 (2009) によれば、津軽方言における「ツキヤ」は古文の過去の助動詞「けり」に由来する。

以下は青森県八戸市方言の「ツキヤ」についての斎藤 (2008) の記述による。やはり<0>終止形に後続する付属語であり、<2>過去の事態のみを示す。<3>モダリティとして扱われている。<4>意外性や<6><7>推定には使われないが、<8>伝聞の表現では使用できる。

<4>話し手がその場面で新規にその情報を獲得した場合には使用できない。したがって意外性の意味の表現はできない。

(27) アソゴニ ポスト ミエデラ*ツキヤ。「あそこに郵便ポストが見えるじゃないか。」

(28) 【初めて食べる食べ物を口にした時】アッ ウメ*ツキヤ。「あつ、うまいじゃないか。」

やはり発話時点で気づいたことについては独り言では使用できないが、<10>回想、感嘆、<8>伝聞などであれば、聞き手への伝達でなくとも使用できる。

(29) 【独り言で】ハー ゴジダ {ジャ/*ツキヤ}。

「あつ、もう5時じゃないか。」

(30) 【昔のことを思い出して】昔ココデ勉強シタツキヤナア [回想]

「昔ここで勉強したものだなあ。」

(31) 【一緒にテストを受けた人に】ナンゴ難シイツキヤアノテスト [感嘆]

「なんて難しいんだ、あのテスト。」

(32) A: ココ昔オ墓アッタ(ンダ)ツキヤ B: ンダツキヤ [伝聞]

「A: ここに昔お墓があったんだって。 B: そうだってね。」

3.7.4. 静岡方言・長野方言

以下の記述は山口 (1987: 159) および山口 (1968)に基づく。

静岡県は現在の日本でもっとも～ケを使う地域である。<0>特に駿河を中心とする地域の方言では行ツケ、咲イケ、飲ンゲ、見ケ、寒カツケのように用言に直接ついて（つまり屈折形式である、群馬県中里村にもこうしたケがあるという（池上 (1954)）、これが、行ツタ、咲いた、飲ンダ、見タの～タと特に区別されている¹⁴。<1>なお～ケは古文の「けり」に遡り、～タも古文の「たり」（<て あり）に遡るので、ともに存在述語起源とみることができる。本稿ではこのうち～ケの方を間接証拠性の形式とみて観察を進める。下記のように、先行研究では<2>過去のできごとを示す<3>テンス形式として分析している。

<4>発見にはタが使われる（ア、来タ来タ）。しかし「ある」の過去形はアツケがほとんどで、（探し物が見つかったときには）コンナトコニアツケと言う。ただし証拠を目前にみるなどしてそれを今確認する場合には、タが使われる（（よごれたズボンを見て）マタ、ドロコ遊ビオシタ！）。

¹⁴ なお山口 (1968) によれば、静岡でも水窪方言ではケの代わりにイツ、サイツ、キツ、ノンズのツがある（この他に西日本の奈良県下北山村に「ツル」（ジューゴロピキツツルワカ「十五匹釣ったよ」）が採集されたという）。

「行ッタ」、「行ッケ」のほかに「行ッタッケ」ということがあり、この3通りの区別がある。この3通りの違いは、次のようであるという。自分から見て、ある人が何時間か前、あるいは何日か前、あるいは何年か前、つまり「過去」に、どこかへ行ったことを人に告げるとき「行ッケ」という。これは、自己の経験にない事実を客観的なものとして述べるということに意識があるのだと思われる。自分がある日ある時どこかへ行ったこと、および他人とか事物の場合なら、自分の目の前で今どこかへ行ったことは「行ッタ」という。<5>すなわちこのような人称制限のある形式であることがわかる。これに対して「行ッタッケ」は自他を問わず過ぎ去ったこと（それは昔のことだったり、ついさっきのことであっても良い）について自分が確認したこととしていう言い方である。すなわち「行ッタッケ」は<9>近過去報告、<10>回想・思い出しに使われる形式ということになる（この点およびその現れる位置という点で、3.7.1. でみた宮城県仙台方言のケリ継承形式と同じであることがわかる）。<5>このようにタはほとんどの場合話者自身の動作について用いられるのに対し、ケで話者自身の行為を語るのは、昔の不連続多数の経験を語る場合がわずかにある程度に限られる。<5>話し手自身のことでも状態述語などではアーアー、面白イッケや欲シクテタマンナイッケなどのように言う。<6><7><8>推定、伝聞の用法についての記述はない。

以下、長野方言の形式に関する記述は馬瀬 (2003: 108-109) に基づく。

長野新潟県境の豪雪地帯である秋山郷の方言では標準語でタの現れる位置（<0>屈折接辞の位置）にタとケ（<1>ケリ継承形式である）が現れる。すなわち屈折形式であり、<2>ともに過去を示す形式であって<3>先行研究はテンス形式とみている。

(33) オレア チョー 山セア エツタ。「俺は今日山へ行った」

(34) アノンナ チョー 山セア エッケ。「あの人は今日山へ行った」

<5>この方言の多くの話者は自分の動作にはタを用い、他人の動作にはケを用いると説明するという。南信の伊那谷南部、下伊那郡上村やその付近でも次のようなタとツの使い分けがあるという。

(35) オラー キンノー 学校ウェ 行ッタガ ([ŋa]) キョーモ 行ッタヨ。

「俺は昨日学校へ行ったが今日も行ったよ」

(36) 太郎ワ キンノー 学校ウェ 行ッツガ ([ŋa]) キョーモ 行ッツヨ。

「太郎は昨日学校へ行ったが今日も行ったよ」

話者は話者自身が行為を行った時にはタ、他人が行為を行った時にはツを用いると述べるという。これ以上の記述はないが、基本的に静岡において見られる体系と同じであると考えられる。<4><6><7><8>意外性、推定、伝聞の用法についての記述はない。

3.8. 近畿方言

<0>下記の諸形式とも連用形もしくはテ形に後続する補助動詞としての存在動詞（イル、オル、アル）を起源としている。これらの形式はそれ自体がテンスによってさらに活用するので、これらの形式は<1>語幹拡張の文法的派生であり、<2>過去には縛られていないと考えられる。ただし活用語尾の現れには制限がある可能性も考えられる。

滋賀方言における継続にはテル・トルがあるが、<5>テルは自称・対称に、トルは他称の

生物を主語とする述語につく（ウチ ホン ヨンデル「私は本を読んでいる」、セートガ アソンドル「生徒が遊んでいる」（以上、杉村（1992: 198）による）。すなわち1人称制限がある。滋賀方言には、さらに無生物主語を示す特徴的な形式タル（eg. 雨フツタル）が存在する（真田（2002: 114））。

大阪方言での（連用形）ヤル／ヨル（ヤルは主に女性が使用、ヨルは主に男性が使用）は<5>第三者の行為・状態に対して使い、話し手の（感嘆・驚き、さげすみなどの）感情を示す（岡本・氏原（2006: 67-70）、下記の例文も、ただし太字は筆者による）。つまり人称制限がある。<4>意外性の用法が明確に存在するかどうかは記述からははっきりわからない。

(37) 【その場にいない3人称の人物である「ゆうこ」に対して】

ユウコチャン、キレイニナリヤッタネエ。

(38) 【2人称の聞き手である「ゆうこ」に対して】キレイニナッタネエ。

ただし強い感情表現やからかいの表現においては、2人称に対してもヨル（この場合は女性もヨルを使う）が使われるという。

(39) オマエ、何シヨンネン!!

(40) コイツ、マタ、フラレヨッタ。

上記の形式には<6>結果からの推定、<7>理由のある推定、<8>伝聞、<9>近過去報告、<10>回想や思い出しの用法は記述されていない。これらを表現する形式については、さらに調査・確認する必要がある。

3.9. 北琉球語

以下の記述は北琉球語のうち首里方言に関するもので、工藤・高江洲・八亀（2007）による記述を要約したものである。シオッタ相当形式が直接体験過去、シテアル相当形式が間接体験過去を示す。したがって<2>過去に縛られた形式であり、<3>先行研究は、本来はアスペクト。テンス形式であったと思われる形式が、その意味を部分的に残しつつ、エヴィデンシャルな、あるいはミラティブな用法を発達させている、とみている。テンスおよび証拠性の形式としていることがわかる。<0>いずれも屈折形式として扱われている。<1>上記の「相当形式」とは、通時的に連用形やテ形、オル、アルに由来する形式から形成されたことを示している。間接体験過去は、痕跡などからの<6><7>推定、<8>伝聞を示し、主体動作客体変化動詞では現在の結果からさらに過去の動作主推定の機能も示す。シテアル相当形式は、さらにふつう終助詞 *saja:* を伴って<4>意外性を示す。直接 vs 間接体験過去の対立はさらに存在動詞、形容詞、名詞述語にもある。

(41) *maja:gwa:ja sinutaN*. 「ネコが死ぬのを見た」〈目撃＝直接的証拠に基づく確認〉

(42) *maja:gwa:ja size:N*. 「ネコが死んだのだ」〈間接証拠に基づく確認〉

(43) *maja:gwa:ja size:saja:*. 「ネコが死んでいる！」〈話し手にとって意外な新事実(直接確認)〉

<5>シテアル相当形式には1人称制限があり、意識不明になっていた場合などでない限り使えない。

上記の形式には<9>近過去報告、<10>回想や思い出しの用法は記述されていない。これらを表現する形式については、さらに調査・確認する必要がある。

3. 10. 南琉球語

以下の記述は下地 (2018: 284) による (例文及びグロスも)。<0>この言語での対象となる形式は、屈折形式の前に位置する補助動詞 (<1>存在述語 *ur-*, *ar-*である) であると考えられる。したがってテンスの屈折語尾が後続し得るので (下地 (2018: 177))、<2>過去に縛られてはいない (ただし活用語尾の現れには制限がある可能性も考えられる。)。主動詞が自動詞の場合、継続相は動作の結果 (主体の状態) (a)を、残存結果相もまた主体の残存に着目した結果 (主体の状態) (b)を表すので、アスペクトの区別ははっきりしないように見える。

(44)a. *cjokinbako=nu=du bari+ur-Ø*.

貯金箱=NOM=FOC 割れる+PROG-NPST

「貯金箱が割れている。」(継続相)

(44)b. *cjokinbako=nu=du bari+ar-Ø*.

貯金箱=NOM=FOC 割れる+RSL-NPST

「(こなごなの破片を見て) 貯金箱が割れている。」(残存結果相)

しかしこれら2つには<3>エヴィデンシャルな違いがある。継続相は、単に動作の結果継続を伝える形式であって、動作の成立場面を自ら確認しているかどうかに関係なく使える。これに対し残存結果相は動作が実際に成立する場面を確認していない場合に使用 (<5>したがって1人称主語を取りにくい)、<6>動作の結果生じた何らかの残存物をもとに、自ら確認しなかった行為を復元するのである。つまり、痕跡エヴィデンシャル的な意味を持つ。

上記の形式には<4>意外性、<8>伝聞、<9>近過去報告、<10>回想や思い出しの用法は記述されていない。これらを表現する形式については、さらに調査・確認する必要がある。

3. 11. 現代日本語 (標準語)

現代日本語には「らしい」(推定)、「そうだ」(伝聞)のように意味からみて証拠性とされる形式がある一方、古文の「けり」に遡る「つけ」もあり、さらに他方では<3>テンス・アスペクト形式とされている「～ている」や「～た」についても証拠性の側面が指摘されている。以下順にみていく。

3. 11. 1. 「がる」、「のだ」、「ようだ」、「みたいだ」、「らしい」、「(連用形) そうだ」、「(終止形) そうだ」、「という」

Aoki (1986) は、*-gar-u*, *=no=da*, *=yoo=da*, *=rasii*, *=soo=da* を日本語における証拠性を示す形式として考察した (形式の表示の仕方は本稿の方式による)。Narrog and Yang (2018) は日本語において証拠性が厳密な意味で義務的な文法カテゴリーであるか否かは議論の余地がある、とした上で、伝聞マーカーとして *=rasii*, *=soo=da* を、推定マーカーとして (連用形) *-soo=da*, *=rasii*, *=ppoi*, *=yoo=da*, *=mitai=da* をあげている (同じく形式の表示の仕方は本稿の方式による)。日本語学での近年の先行研究を見ると、<3>証拠性をモダリティの下位分類としていることがわかる: 「認識のモダリティの形式の類型の1つとして、何らかの証拠に基づく認識を表す形式類がある。(中略) その情報が何に基づくかということについての認識的な意味を「証拠性」(evidentiality) という」(日本語記述文法研究会編 (2003: 163-164)) 日本語記述文法研究会編 (2003) は、「証拠性」をこのように定義した上で、「ようだ」、「み

たいだ」、「らしい」、「(連用形) そうだ」、「(終止形) そうだ」、「という」などの形式のみを「証拠性」を示す形式とし、話し手の観察や<6><7>推定、<8>伝聞を示す形式として取り上げている。<0>「(連用形) そうだ」を除き、いずれも連体形や終止形に後続する付属語であると考えられる。したがって先行する終止形でテンスを標示することができるので、表現する事態は<2>過去に縛られない。<1> [形式名詞+ダ] や引用動詞によって構成されており、存在動詞／コピュラに由来するものではない。

<5>仁田 (1991: 101, 109) には次のような人称制限が指摘されている。

(45) {私/*君/彼} は学校へ行く (だろう)。

(46)a. 僕は彼に {*投票するらしい/?投票するにちがいない/?投票するはずだ}。

(46)b. 君は彼に {*投票するだろう/*投票するらしい/?投票するかもしれない}。

庵他 (2001: 286-287) では「のだ (んだ) ¹⁵」に次のような<4>発見や<10>思い出しを示す機能が指摘されている (ただし証拠性との関連で紹介されているわけではない)。「のだ (んだ)」が使われることによって、発話の時点で命題内容に気付いたことが明示される。

(47) このボタンを押せばよかったんだ。

(48) 来週パーティーを {*開いた/開くんだった}。

日本語記述文法研究会編 (2007: 145) では「(タ形の) 発見の用法は「のだ」と共起することも多い」としている。

(49) [図書館で] あれ、田中君ここにいたんだね。

<9>近過去報告の機能に特化した付属語の存在は報告されていない。

3.11.2. 「っけ」

以下の記述は主に日本語記述文法研究会 (編) (2003: 45-46, 273) に基づくが、筆者の内省も加えている (以下 3.11.3.節、3.11.4.節も同じ、なお筆者は 1965 年東京生まれの話者である)。

<0>ツケは動詞とイ形容詞では過去形の後に接続する。ナ形容詞や名詞の過去形～ダッタの他、非過去形ダにも接続する。したがって述語の種類によっては<2>過去に縛られていることになる。<3>伝達態度のモダリティ形式として扱われている。<1>ケリ継承形式であるが、<4>意外性、<6><7>推定、<8>伝聞、<9>近過去報告などの用法はない。<10>過去の経験を回想したり、忘れていたことを想起したことを表す。<5>一部の述語では 1 人称制限¹⁶が観察される。

(50) {あの人/*私} まだ元気だ (った) っけ!?

¹⁵ 「のだ」にさらに引用の「って」が後続した「ンダッテ」という形式が、(標準語におけるような) 伝聞の用法ではなく、「自分のこと、あるいは自分の経験に基づく情報を聞き手に提供する」という機能で用いられることが、愛知県尾張方言の中年層・若年層によって使用されている (キョー ブカツダッタンダッテ、メッチャ ツカレタ「(私は) 今日部活があった、とても疲れた」、以上高見 (2010) による)。このことは証拠性 (伝聞) の形式がさらに情報管理 (1.2. 参照) の用法を発達させてきたものと考えられる。

¹⁶ 査読者の方に御指摘をいただいたが、大病をした後に、以前に撮影した自分の写真をみながら話しているというような状況であれば「このとき私まだ元気だったっけ?」のような文が発話可能である。すなわち話し手自身の過去の状況ではあるが、より客観的に自己の記憶のないことを問題にしているという状況であれば使える。したがってこれもまさに間接証拠性における 1 人称制限の特質を示している。

3.11.3. 「ている」

-te i- はアスペクトの<0>補助動詞 (<1>存在述語「いる」) による新たな語幹の立ち上げであり、屈折接辞の部分で時制はさらに変化する。「ている」と「ていた」では本稿で注目している証拠性に関連する特徴に関する振る舞いが異なるため、両者を分けて取り扱う¹⁷こととする。

「テイル」は<2>過去ではなく、<3>一般に先行研究の扱いからみれば、アスペクトとテンスの複合形式ということになる。しかし定延 (2006) は、「ている」の表現する命題が特定の具体的な場面における観察者と観察対象を必要とする「観察」であることに注目し、「ている」を『「観察してみると現在これこれである (これこれのデキゴト情報がある)」』ということを表すエビデンシャルである」と定義している (定延 (2006:174))。

仁田 (1991: 80-81) には次のような<5>1 人称制限が指摘されている。

(51) {*私/*君/子供} が運動場で遊んでいる。

しかし電話で現在の話し手自身の状況を伝える場合や、聞き手に話し手の状況を強く認識させたい場合などには 1 人称主語も可能であると考えられる (「オレ今宿題やってんだよ」)。

変化動詞 (／限界動詞) の場合、結果状態をテイル形で述べれば<4>意外性を示すことができる ((あっ) 金魚が死んでる、雪が積もってる)。そこではその発話時点で発見した結果から必然的に過去に起こった事象 (金魚が死んだ、雪が降った) が<6>推定 (含意) されることになる。動作動詞 (非限界動詞) では現在進行の意味に解釈されるのがふつうであるが、文脈によっては<6>結果状態からの推定を示すこともできる ([クッキーが減っているのをみて]「あの子、またクッキー食べてる」、吉田 (2012))。<8>伝聞の用法、<9>近過去報告用法、<10>回想や思い出しを表現する用法はない。

3.11.4. 「ていた」

「テイタ」は<0>補助動詞と屈折からなる形式で、<1>存在述語起源であり、<2>過去を示す。<3>「テイル」と同様、アスペクトとテンスの複合形式である。

<5>梅野 (2011) はテイタ形に証拠性の機能があることについて、1 人称制限を証拠に論じている。

(52) {??私は/妹は} チョコを 5 個食べていた。

しかし過去のある時点でのアリバイを語る場合や、過去の習慣を語る場合であれば 1 人称主語も可能であると考えられる (「昨日の今頃は私は家でテレビを見ていた」「あの頃はオレは毎朝納豆を食べていた」、以上は作例で、筆者の内省による)。ただ話し手が自身のかつての行動を客観視している感じを伴っており、やはり 1 人称制限があるとみるべきだろう (今後さらなる検討が必要である)。

筆者の内省によれば、<4><6><7><8>意外性、推定、伝聞の用法はない。<9>近過去報告用法と、<10>回想や思い出しを表現する用法はある (例:「あの頃はよく遊んでいた」「さっきそこで本を読んでいた」)。

¹⁷ 査読者の方の指摘を受け、再考・推敲した。記して感謝申し上げたい。

3.11.5. 「た」

-ta はそれ自体が<2>過去を示す<0>屈折形式であり<1>「てあり」に遡る。<3>テンスの形式とされている（例えば日本語記述文法研究会（編）（2007））。他方で、状態性述語の過去形には<4>発見の用法があることが指摘されている（「[鍵を探していて] あっ、ここにあった」、日本語記述文法研究会（編）（2007: 144-145））。定延（2014）はミラティブをエビデンスの一種とし、Delancy（1997: 39）が「ミラティブは受け入れ準備なし、期待外（unprepared, unexpected）のきもちとむすびつく概念」であるとしていることを踏まえた上で、「発見の「た」に探索意識は必要だが、「期待」は不要なので、「発見」と「ミラティブ」のずれは比較的小さい」（定延（2014: 19-20））としている。

さらに定延（2014: 19-20）は次のように述べ、探索意識が活性化されていれば、状態性述語でなく、動作性の述語であっても<4>発見の用法が可能であるとしている。

窓の外を見たところ運動場を人が走行中であるのが見えたという場合、「あ、走ってる」とは言えても「あ、走った」とは言わないが、何気なくテレビのチャンネルを変えたところ野球の試合が映り、盗塁の世界記録をいつ塗り替えるかと言われている選手が走塁中であった場合は「あ、走った」と言える。これも、遡及的な形ではあるが探索課題「あの選手はいつ盗塁するのか」の設定によって探索意識が活性化され、動詞「走る」が変化動詞になっていると考えられる。

筆者の内省によれば、<5>1人称制限はなく、<6>結果からの推定、<7>何らかの理由に基づく推定、<8>伝聞など、の用法はない。<9>近過去報告用法はもちろん存在する。

<10>回想や思い出しの用法に関しては、日本語記述文法研究会（編）（2007: 145-146）によれば次のようであるという。

状態性述語の過去形は、想起の意味で用いられることがある。話し手は過去にすでにその事態を知っており、一時的に忘却していたが、今それを思い出したという意味である。この用法は特に名詞述語に多く現れる。

そうだ、一時から会議だった。

動詞述語や形容詞述語を想起として用いるために「のだ」や「のだった」によって全体を名詞述語にすることができる。

あっ、シャンプー買うんだった。

そう言えば、ここのまんじゅう、けっこう {おいしかったんだ/おいしいんだった}。

動きを表す動詞述語では、未来の事態だけでなく、過去の事態についても過去形単独では想起の意味を表すことはできない。

忘れていた。昨日は会議に {*出た/出たんだ/出たんだった}。

したがって状態述語には回想用法があるが、動作述語にはないということになる。

4. 結論

4.1. ある形式を「文法カテゴリー」「証拠性」を構成する要素としてみるべきか否か

ここではまず、ある接辞や小辞など、単なる語彙ではなく「文法的である」と考えられる形式が、一つの文法カテゴリーを構成する一要素であるか否かを判断する基準について考えたい。それはその要素が他の要素とパラダイムをなしているかによるだろう。より詳しく言えば、同じ統語的位置に現れて、他の要素と形式的にも意味的にも相補的な分布を

なし、さらにはその対立要素による集合がその言語のある品詞などにおいて全体に適用される場合（つまり生産性が高い場合）、そうした諸要素の対立からなるパラダイムは十全な1つの文法カテゴリーをなす、といえるだろう。

逆に言えば、問題の形式が出現しなくとも、単にデフォルトの意味が実現するだけの場合、無理にその形式がゼロ形式と対立して文法カテゴリーをなす、とみる必要はない。こうした場合には、その形式の使用は単にある語彙を用いているのと大差なくなってしまう。

したがって本稿の対象言語において、屈折接辞によって完結した動詞複合体の後ろに出てくる付属語（や次いで屈折接辞の前に出てくる補助動詞や語幹拡張接辞）である場合には、（屈折でないのである意味当然のことだが）その出現が任意である場合が多く、その点で文法カテゴリーをなす要素としての性格は弱い¹⁸ようだ。

このように考えると、本稿の対象言語の諸形式でもっとも文法カテゴリーとしての性格を強く示す証拠性の形式の対立は、北琉球語におけるそれであろう。この言語における証拠性の対立は機能においても出現分布においても相互排他的である。次いで古文とトルコ語における対立である。これらの言語における証拠性の対立は、出現分布の点で相互排他的だが、機能面では一方がデフォルトの形として使用可能である。

一方、対象言語において<8>伝聞に特化した諸形式（モンゴル語の *gene*、朝鮮語の *-tay*、日本語の「終止形=そうだ」）などは文法カテゴリーをなす証拠性の形式とはみなしがたい。同じ位置に現れて相互排他的に現れる他の要素が認識モダリティを示す要素である場合は、たとえ意味的に伝聞が情報源を示すものであっても、認識モダリティの要素とみなすべきであると考え。例えば日本語で（話者の主観的な判断を示し）典型的な認識モダリティの形式と考えられている「だろう」は、「終止形=そうだ」と相互排他的に現れる（「*あの人が食べただろうそうだ/*あの人が食べたそう（なの）だろう」）。

<6>結果からの推定や<7>何らかの理由に基づく推定を示す形式のうち、その機能に特化した形式であるモンゴル語の *V-PTCP yum biš biz* や *V-PTCP ni lavtaj*、日本語の「らしい」などについても同様のことが言えると考え。

Willett (1988) 以来のこれまでの研究（特に Aikhenvald, A. (ed.) (2018)）の問題点は、もっぱら（推定や伝聞などの「情報源」という）意味によって間接証拠性や認識モダリティを定義し、その観点から諸言語の形式を収集し観察した上で、翻って証拠性や認識モダリティの意味的な近接や類似について論じている点にあると考え。通言語的な研究を行うためには、まず出発点としては意味を基準にして諸言語の諸形式を観察するしかないが、その後の分析においては、上記のような観点から当該言語で当該形式がどのような位置でど

¹⁸ 査読者の方から、付属語や語幹拡張接辞であっても相互排他的な機能によって対立しており、その使用が義務的であれば、文法カテゴリーをなすのではないか、という御指摘をいただいた。それはその通りであり、実際に中央ボモ語では付属語が体系的な証拠性の対立を示している（亀井・河野・千野（編）（1996: 657））。ここで意図している説明は「本稿の対象言語」においては、（現時点まで筆者がこれまで観察してきた限りにおいては）証拠性を付属語や語幹拡張接辞によって相互排他的・義務的に表現していると感じられる言語を見い出せていない、という傾向の指摘である。ただ諸形式の使用の義務性を分析・把握することは容易ではない。5節の今後の課題で取り上げる3人称主語の感情述語に使用される[連用形-そうだ]や *-gar* の義務性は高いといえるだろう（[連用形-そうだ]については、連用形をどう位置付けるかという形態論の問題であるが、これを（準）屈折接辞とすることも考えられよう）。諸形式の義務性の問題については、今後さらなる研究の深化が必要である。

のような要素と対立しているかを確認し、その位置づけを行っていくことが重要だろう。

4.2. 証拠性形式の素材

東北アジアの地域・類型の諸言語の間接証拠性の形式は一般にその素材／語源に存在動詞／コピュラを中心とした状態述語を持つ完了表現であることが明らかになった（下記表1の①の部分）：モンゴル語の *žee* (<*-jU a-QU)、朝鮮語の *-keyss-* (<-key hΛ-e iss-)、日本語古文の「けり」 (<「来＋あり」)、日本語諸方言にみられるケリ継承形式、日本語近畿方言のテル・トル・ヤル・ヨル、北琉球語のシテアル相当形式、南琉球語の連用形＋ar、日本語標準語のタ (<テアリ) とテイル・テイタ、である。トルコ語の *-mİş* も完了のアスペクト形式である。この点で大きく異なるのはツングース諸語のナーナイ語である。ナーナイ語には語彙的な要素以外、あまりはっきりとした間接証拠性の形式が存在しない。ナーナイ語の証拠性に関わる諸形式は存在動詞や完了との関係を示さない。こうした特異性は他のツングース諸語にも共通することなのか、今後他のツングース諸語についても精査していく必要がある。

4.3. 証拠性の対照言語学的考察

間接証拠性に関連した機能を示す対象言語の諸形式について、その統語的位置と機能の関連を考察するため、これまでみた対象諸言語のデータを整理して下記の表を作成した。

表1：本稿の対象言語における間接証拠性関連形式の素材と機能の整理

	補	補-屈	派-屈	屈折				付属語		
	モンゴル語 bajna	現代日本語 テイタ	朝鮮語 -te-	北琉球語 -zeen	トルコ語 -mİş	古代日本語 ケリ	モンゴル語 -žee	現代日本語 ラシイ ソウダ ⁹ etc.	古代日本語 メ	現代日本語 ツク
<1>存在述語起源	○	○	×	○	P	○	○?	×	×	○
<2>過去時制のみか	×	○	×	○	○	△	○	×	×	△
<3>カテゴリー	A	TAE	TE	TE	ATE	TE	ATE	EM	E	M
<4>意外性	○	×	×	○	○	○	○	△/ダ ⁹	×	×
<5>人称制限	×	○	○ ¹⁹	○	○	○	○	×	○	△
<6>結果からの推定	○	×	×	○	○	○	○	○ラシイ	○	×
<7>理由ありの推定	○	×	×	○	○	○	○	○ラシイ	○	×
<8>伝聞	×	×	×	○	○	○	×	○u ソウダ ⁹	×	×
<9>近過去報告	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×
<10>回想・思い出	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○

¹⁹ ただしこの判定は *-te-* が話者の感情を示す場合には逆に1人称主語のみで可能である点 (3.4.節参照) からは問題がある。

なお使用した略号は A: aspect, T: tense, E: evidentiality, M: modality, P: perfect, 補: 補助動詞, 派: (文法的語幹拡張) 派生接辞, 屈: 屈折接辞、である。直説法もモダリティの 1 つではあるが、有標のモダリティとしては扱わない。「きれつづき」もここでは文法カテゴリーとしては扱わない、なお情報が不十分な近畿や南琉球語、大きな違いを見せるナーナイ語の定動詞形、現代日本語のテイル形などをスペースの都合もあって省略した、○△×の判断については恣意的な面もあるが、紙面の都合もあり逐一注記することはあきらめた。今後こうした観点から各言語の記述を一層精密化していく必要もあると考えている。

まず(朝鮮語とナーナイ語の形式を除き)屈折接辞(および屈折を含む形式)が間接証拠性の機能をよく実現していることがわかる。4.5節で述べるように本稿では間接証拠性の本質を話し手による(時間的に制限された)「観察」とみるが、(ナーナイ語を除く)屈折接辞(および屈折を含む形式)には 1 人称制限があり、話し手が観察者となっていることがわかる(ただし付属語(4.1節参照)の古代日本語メリにも 1 人称制限がある点は問題である)。補助動詞によるモンゴル語の *bajna* は先行研究ではアスペクトとして捉えられているが、(ナーナイ語を除く)屈折接辞(および屈折を含む形式)はいずれも先行研究で間接証拠性の形式として取り上げられている(4.1節参照)。

4.4. ケリおよびその継承形式にみる通時的考察

まずケリおよびその継承形式の機能を整理すると次の表のようになる。

表 2: ケリおよびケリ継承形式の機能 (—は十分な記述の得られなかったことを示す)

<0>動詞複合体での位置	屈折		屈/付	付属語			
	日本語 古文 -keri	静岡 -kke	岩手 -kke/=kke	種子島 =keru	青森 =kkja	仙台 =kke	現代 日本語 =kke
<1>存在述語起源	○	○	○	○	○	○	○
<2>過去時制のみか	△	○	○	×	△	△	×
<3>カテゴリー	TE	T	TEM	M	M	M	M
<4>意外性	○	×	×	○	×	—	×
<5>人称制限	○	○	○	—	×	○	×
<6>結果からの推定	○	—	—	—	×	—	×
<7>理由ありの推定	○	—	—	—	×	—	×
<8>伝聞	○	—	—	○	○	—	×
<9>近過去報告	×	○	○	×	○	○	×
<10>回想・思い出	×	○	○	○	○	○	○

古文の「けり」と、(現代日本語の諸方言において異なった「位置」と機能を示す)その継承形式は、証拠性に関連する通時的な変遷を研究する上で興味深い対象である。

動詞複合体における一方向仮説により、テンスを表す形式がモダリティを示すようになる (Traugott (1982))、と考えられている (衣畑 (2021: 19) も参照)。こうしてテンスからモ

ダリティの意味に移行すると、テンス形式に後続する付属語などの形式でその意味を示すようになり、その意味範囲は限定されたもの（回想、思い出しなど）になるものと考えられる。一方、モーダルな機能はアスペクトやテンスよりも広いスコープを持つので、より外側から掛かろうとする²⁰。したがって動詞複合体におけるその位置は後ろへと移動することになる。

4.2.節でみたように、東北アジアの言語では、結果継続のアスペクト形式（往々にして完了的な準動詞形に存在動詞／コピュラが補助動詞として後続する形のものである）がその意味を拡張させたり、ずれさせたりすることによって証拠性の意味を成立させてきた（1.2.節、1.3.節も参照）。近畿方言のトル・タル・ヤル／ヨルなどで 1 人称制限が生じていることは、こうした形式が間接証拠性の形式に発展していく過程にある萌芽的な形式であると考える。

以上の歴史的変遷についての考察を 4.3.節でみた統語的位置と機能の関心の観察と統合し、間接証拠性の通時的な発展と変遷の過程についての仮説をまとめるならば、次のようになるだろう。

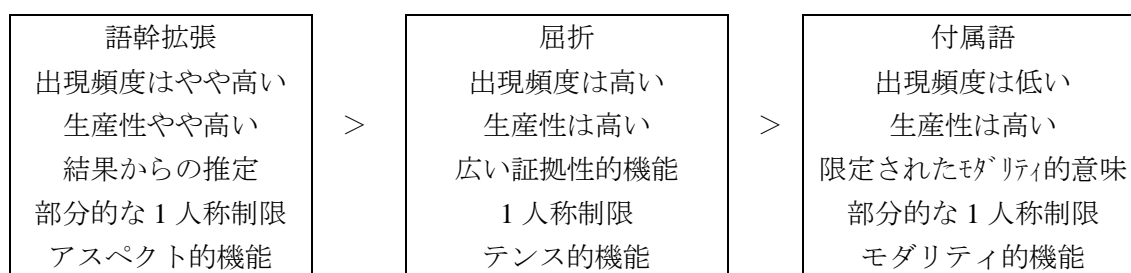


図 1：間接証拠性の発達と変遷に関する仮説

4.5. アスペクトからの証拠性発達の背景となる「二重性」と語順特性

しかし、欧米の言語などでは、やはり上記のようなアスペクト>テンスの移行などが観察されているにも関わらず、完了相や結果相が証拠性の形式に発展することがあまりないように思われる。

この違いは東北アジア地域・アルタイ型類型の言語における、視点と時間表現における「二重性」によって生じるものと考えたい。すなわち準動詞＋状態述語の組み合わせにおいて、準動詞が動作行為（やその結果状態）の発生自体を示し、状態動詞が現在の話者の視点からの結果状態の把握を示し、もともとはその視点と時間はそれぞれに二分されていたが、その形式が一体化するにつれ、一つの形式に 2 つの視点と時間が重なり、その組み合わせが 1 つの機能を実現するようになってくると考えられる（岸田 (2015) を参照）。そのためアスペクトから（テンス・）証拠性へという機能の変化が起こるものと考えたい。この「二重性」を生じさせている背景には SOV の基本語順が大きく関わっているものと考えられる（風間 (2020) も参照）。Woodbury (1986) は、間接証拠性の意味は形式と時間的な文脈

²⁰ 「述語のあたまの方ほど、proposition 的 (dictum 的) 性格が強く、その末尾にいくほど、modal (modus) 的な性格が強い」という（南 (1989: 1685)）。

との相互作用によって生じる、としている。つまりデキゴトの実現時点と話し手が情報源を通じてそのデキゴト情報を得る時点がずれているというところから生じる、としている。

したがってここでは、本稿で扱ったさまざまな間接証拠性を、

[事態実現時点] での 〈一観察〉 / 〈観察後の忘却〉 と [発話時点] における 〈認識〉 の組み合わせとして捉える²¹ことを提案する。

表 3: 各種の間接証拠性関連形式に対する本稿の分析とその機能との対応関係

[事態実現時点]	[発話時点]	機能	言語と形式の例
〈一観察〉	〈結果を認識〉	結果からの推定	古文ケリ、トルコ語-mlş
〈一観察〉	〈何らかの理由から認識〉	理由からの推定	古文ケリ、トルコ語-mlş
〈一観察〉	〈他人から聞いて認識〉	伝聞	古文ケリ、トルコ語-mlş
〈一観察〉	〈直接に認識 ²² 〉	意外性・発見	古文ケリ、トルコ語-mlş
〈+観察〉忘却	〈再認識〉	思い出し	状態述語+「た」
〈+観察〉忘却	〈認識のため確認〉	確認	「っけ？」
〈+観察〉忘却	〈再認識〉	回想	「っけ」
〈+観察〉	〈他人に報告〉	近過去報告	朝鮮語の-te-、 日本語東北方言のツキヤ、ツケ

〈一観察〉にせよ〈観察後の忘却〉にせよ、話し手はあくまでも**観察者**として事態を観察するのであって、基本的にその事態の主体にはなり得ない。このため当然人称制限が生じる。ただし行為の時点で無意識であったなど、発話時点で自己の行為を客体視する場合にはその人称制限が解除されるのである。

すなわち本稿では直接証拠性の本質は〈体験的判断〉にあり、間接証拠性の本質は〈観察〉にあると考える。ここでいう「体験的判断」とは「話し手自身の意識的な行為、およ

²¹ 例えば「伝聞」であれば、事態の実現時点では話し手はその事態を観察しなかったが、その後その事態の実現したことを他人から聞くことによってその認識を得る、というように説明される。「思い出し」や「確認」、「回想」では、話し手はその事態を観察したものの、その事実をいったんは忘れてしまい、発話時点で思い出したり、聞き手に確認したり、記憶を遡ることによって再認識する、というように説明される。こうした後半のプロセスを「観察」でなく「認識」と呼ぶのは、それが話し手の観察に拠らず伝聞など第三者からの情報提供による場合などを含むためである。

²² 筆者が〈観察〉として考えているのは、まず話し手がまずその立場（観察者）にあるということである。次にその行為が行われた時点での観察である。査読者の方から「意外性・発見は〈直接に認識〉するのであるから直接証拠性ではないか」という意見をいただいたが、どのような経路で発話時点までにその情報を認識しても、話し手が観察者であることに変わりはなく、行為成立の時点では観察せず後から認識した、という点では推定や伝聞とも違いはない。したがって本稿ではこれも間接証拠性であると考え。本稿でいう間接証拠性は、基本的には事態実現時点と発話時点の間で話し手の持つ情報に何らかのギャップがある、と説明することもできる。つまり〈一観察〉もしくは〈観察後忘却〉であれば、何らかの経路でその情報を認識するまで情報にギャップがある。〈一観察〉でその後も認識することがなければ、そもそも過去にあったこととして発話される可能性はない。行為の成立の全プロセスを〈観察〉もしくは〈実体験（自身による行為を含む）〉すればそれは直接証拠性の表現になるものと考え。

び(2,3人称の行為である場合には)話し手が現在の結果や進行中の一時点の状態だけでなく、過去のその行為の成立の限界点(限界動詞の場合)や開始限界(非限界動詞の場合)の状況も観察・把握している²³もの」と定義することにする。この対立は東北アジアの地域・類型の言語においては副動詞形にも観察される(風間(2017: 62-64))。先行研究での直接証拠性と間接証拠性の対立は、文字通り直接体験と間接的な認識(推定や伝聞)であった。これに比べると筆者の考える直接証拠性の範囲はやや狭い。3人称の事態を観察してもそれが行為の成立の全体的なプロセスを把握した観察ではない場合に、1人称制限のある何らかの有標の形式によって表現されるならば、それも間接証拠性の形式とみなす。逆からみれば、筆者の考える間接証拠性の範囲は先行研究一般のものより広く、有標の形式によって表現される3人称の事態の(時間的に)部分的な観察を含むものである。

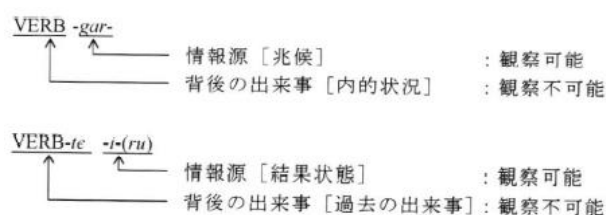
上記の定義を踏まえた上で、最後に朝鮮語の *-te-* や東北方言のツキャ、ツケにみられる「近過去報告」の位置づけについて再考する。この用法では事態の実現時点でも発話時点でも話し手にはその事態についての情報があり、情報のギャップはない(註22参照)。「事態実現時点」では〈+観察〉であり、先に示した本稿の間接証拠性の定義における〈-観察〉/〈観察後の忘却〉という基準にも合致しない。ただし1人称制限はあるので、話し手は観察者である。したがってここで問題になるのは話し手がその事態の行為の成立を観察したかという点にある。朝鮮語の場合、*-te-* はもともとが未完了のテンスであり、事態のプロセスの一部を観察するものとする。東北方言のツキャ、ツケでも話し手による観察は一時的なものであり、行為の成立の全プロセスを捉えているのではないようだ。したがって本稿ではこうした「近過去報告」の用法を示す形式もひとまず本稿でいう「間接証拠性」の形式とみることにする。ただしなお問題は残っており、今後のさらなる検討を必要とする。

5. 今後の課題

日本語をはじめ感情・感覚述語には本稿で扱った<5>人称制限とは逆の人称制限(例えば日本語における「*あの人はうれしい/痛い」のような3人称主語の不可)があり、日本語であれば3人称主語を表現するために「～がる」や「(連用形) そうだ」を用いる必要がある。風間(2013)で扱ったが、朝鮮語やモンゴル語、トルコ語にもこうした人称制限はある。しかし本稿でみた人称制限(証拠性形式を**使用した形式**で**1人称主語**が許されない)とは全く異なり、こうした感情・感覚述語では、**一部の述語**に限って**3人称主語**が許されず、

²³ 無意識の行為でない限り、話し手は自分の行為の開始から終了までの全プロセスを捉えているのがふつうであるので、この定義は、要するに「話し手がプロセスを捉えていること」に集約できる。「過去のその行為の成立の限界点(限界動詞の場合)や開始限界(非限界動詞の場合)の状況」を、以下では単に「行為の成立」と呼ぶ。なお、こうした定義ではなお意外性・発見の一部については問題が残るかもしれない。開始限界などを観察していない場合にこそ、結果状態を見た話者にとって意外性が感じられるのであると説明できるが、本稿の対象言語の諸形式における意外性・発見の実態のうちのどの程度がこうした状況に当てはまるのかは定かでない。Aikhenvald(2012: 437)が意外性として挙げる5つの特徴の1つには「発見」も含まれているが((i) sudden discovery, (ii) surprise, (iii) unprepared mind, (iv) counterexpectation, (v) information new)、「意外性」と「発見」を同じ分類に含めている点にも問題がある(査読者の御指摘による)。間接証拠性と意外性の関係に関する論争も踏まえ、この点についても今後さらに検討していく必要がある。

証拠性を含む何らかの形式を**使用しなければならない**。つまりその制限のかかる状況も、制限の解除のしかたも、制限される人称も、異っているのである。しかもその「何らかの形式」は、主に視覚情報源を明示するものだが（日本語：-(i)soo=da, 朝鮮語：-(y)n ges gat-a, モンゴル語：baigaa bololtoj, トルコ語：gör-ün-üyor、詳しくは風間 (2013) を参照されたい）、本稿で扱ったような存在動詞／コピュラによる結果継続のアスペクト形式を素材（source）としない。したがってこうした形式による対立は機能面でも形式面でも本稿で扱った形式とは別次元のものとして考えなければならない。ただ先行研究の中にはこうした形式も証拠性の形式として取り扱っているものがある。岸田 (2015) は日本語における -gar- と -te i-(ru) における観察の可能／不可能の現れを並行的なものとして捉えて提示している。



そもそも可能なことであるのかもわからないが、本稿で提案した証拠性の対立とは別次元とも言うべき様相を呈すこうした感情述語における対立の統合的・体系的な位置づけ（自己性としての位置づけの可能性を含む）はさらに大きな問題であり、今後の課題であると考えている。

1 人称制限を持つ朝鮮語の -te- が感情述語においては 1 人称主語でのみ使われる点はむしろ「ねじれ」の状況を示している。さらに、いわゆるシロンゴル・モンゴル諸語のうち少なくとも保安語における主観／客観の対立では、ふつう 1 人称主語の行為／状態は主観形式で示されるにも関わらず、「怖い」、「足がだるい」などの制御不能の状況に関しては客観形式で示されるという（佐藤 (2016)）。シロンゴル・モンゴル諸語にはチベット語の影響が強く及んでいるが、このような証拠性の対立を考慮に入れつつ、通言語的な証拠性諸要素の統合的・体系的な位置づけについて、今後さらに考えていく必要がある。

[謝辞]

本稿は、北方言語学会第 4 回大会で発表させていただいた内容が基になっている。学会で発表を聞いてくださった先生方、およびコメントを下された先生方に感謝申し上げる。貴重なコメントを下された 2 名の査読者の先生方にもお礼申し上げたい。そして何より時間を割いて例文の適格性を判断するとともに貴重なコメントを下されたコンサルタントの方々に深くお礼申し上げたい。

略号一覧 (Leipzig Glossing Rules にないもののみ)

#: 複合語境界, NPST(non-past): 非過去, REPORT(ative): 伝聞, RSL(resultative): 結果相, SFP(Sentence final particle): 文末小詞

参考文献

- Aikhenvald, A. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University press.
- Aikhenvald, A. (2012) The essence of mirativity. *Linguistic Typology*. 16: 435-485
- Aikhenvald, A. (2018) Evidentiality: The framework. In A. Aikhenvald (ed.) (2018), 1-55.
- Aikhenvald, A. (ed.) (2018) *The Oxford handbook of evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, A. and R. M. W. Dixon (eds.) (2003) *Studies in Evidentiality*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin.
- Aoki, H. (1986) Evidentials in Japanese. In Chafe and Nichols (eds.), 223-238.
- Avrorin, V. A. (1961) *Grammatika nanajskogo jazyka, t. II*. AN SSSR, Moskva/Leningrad.
- Brosig, B. and E. Skribnik (2018) Evidentials in Mongolic. In A. Aikhenvald (ed.) (2018). 554-579.
- Bergqvist, Henrik and S. Kittilä (eds.) (2020) *Evidentiality, egophoricity, and engagement* (Studies in Diversity Linguistics 30). Berlin: Language Science Press.
- Bybee, J., R. Perkins and W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Chafe, W. L. and J. Nichols (eds.) (1986) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, NJ: ALEX Publishing Corp.
- De Haan, F. (2001a) The relation between modality and evidentiality. *Linguistische Berichte*. 9: 201-216.
- De Haan, F. (2001b) The Cognitive Basis of Visual Evidentials. *Proceedings of the 4th Conference on Conceptual Structure, Discourse, and Language*. 91-106. Stanford: CSLI Press.
- De Haan, F. (2005) 78 Coding of Evidentiality. *WALS*: 318-321.
- Delancy, S. (1997) Mirativity: The grammatical marking of unexpectedness information. *Linguistic Typology*: 1: 33-52.
- Delancy, S. (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics*. 33: 369-382.
- Forker, D. (2018) Evidentiality and its relations with other verbal categories. In A. Aikhenvald (ed.) (2018). 65-84.
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. New York: Routledge.
- Haspelmath, M., M. S. Dryer, D. Gil, and B. Comrie (eds.) (2005) *The world atlas of language structures*. Oxford: Oxford University Press.
- 林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』 東京：白水社
- Hengeveld, K. and H. Olbertz (2012) Didn't you know? Mirativity does exist! *Linguistic Typology*. 16: 487-503.
- Hill, N. (2012) "Mirativity" does not exist: *hdug* in "Lhasa" Tibetan and other suspects. *Linguistic Typology*. 16: 389-433.
- 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫 (編) (1992) 『現代日本語方言大辞典 1』 東京：明治書院
- 池上二良 (1954) 「雨が降っけ」群馬大学『国語研究』1巻4号: 3-6. (筆者未見)
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 白川博之 (監修) 東京：スリーエーネットワーク

- Johanson, L. (2003) Ch. 12 Evidentiality in Turkic. In A. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.), 273-290.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』東京：大修館書店
- 春日和夫 (1968) [1980 (再版)] 『存在詞の研究』東京：風間書房
- 風間伸次郎 (2005) 「ナーナイ語の疑問詞による反語表現について」『環北太平洋の言語』12: 129-163.
- 風間伸次郎 (2011) 《研究ノート》「(特集「モダリティ」) ナーナイ語のモダリティ」東京外国語大学語学研究所(編) 『語学研究所論集』16: 57-74.
- 風間伸次郎 (2013) 「アルタイ型言語における感情述語」『北方人文研究』6: 83-101.
- 風間伸次郎 (2015) 「日本語(話しことば)は従属部標示型の言語なのか? —映画のシナリオの分析による検証—」『国立国語研究所論集』9: 51-80.
- 風間伸次郎 (2016) 「特集「情報構造と名詞述語文」データ：ナーナイ語」『語学研究所論集』21: 259-268.
- 風間伸次郎 (2017) 「条件と継起の連続性について」『北方言語研究』7: 35-68.
- 風間伸次郎 (2020) 「アルタイ型言語の語順特性およびそれと内的関連性を持つ諸特徴について」『北方言語研究』10: 17-40.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂
- 岸田泰浩 (2015) 「間接的エヴィデンシャルティにおける意味と形態の対応について」2014年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」発表レジュメ
- 金秀榮, 安秉坤 (2012) 「日韓両言語の過去回想表現「つけ」・「な」と「-더」・「-지」の対照研究」『일어일문학(日語日文学)』54, 51-66.
- 衣畑智秀 (2021) 「宮古狩俣方言の結果相 *ufu* の文法化 —統語と意味のミスマッチ—」『日本言語学会第162回大会予稿集』19-25.
- 国立国語研究所 (1989-2002) 『方言文法全国地図』1~5. 東京：大蔵省印刷局・財務省印刷局
- 河野六郎 (1948) 「朝鮮語の過去 *de* について」*Tôyôgo Kenkyû*. 4: 35-58.
- 黒島規史・崔正熙 (2016) 「朝鮮語の情報構造と名詞述語文」『語学研究所論集』21: 213-226.
- 小林隆 (2004) 『方言学的日本語史の方法』東京：ひつじ書房
- 工藤真由美・高江洲頼子・八亀裕美 (2007) 「首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャルティ—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47: 151-183.
- Kullmann, R. and D. Tserenpil (1996) *Mongolian Grammar*. Honk Kong: Jenso. ltd.
- Lau, M. L. and J. Rooryck (2017) Aspect, evidentiality, and mirativity. *Lingua*. 186-187: 110-119.
- Lee, Ch. and J. Park (2020) *Evidentials and Modals*. Leiden/Boston: Koninklijke Brill NV.
- 李翊燮・李相億・蔡琬 (2004) 『韓国語概説』梅田博之監修・前田真彦訳 東京：大修館書店
- Malchukov, A. N. (2000) Perfect, evidentiality and related categories in Tungusic languages. *Evidentials: Turkic, Iranian and neighbouring languages*. Johanson, L. and Utas, Bo. (eds.) Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- 馬瀬良雄 (2003) 『信州のことば —21世紀への文化遺産』長野：信濃毎日新聞社

- 南不二男 (1989) 「日本語 III) 現代日本語の輪郭」 亀井・河野・千野 (編) 『言語学大辞典 第2巻』 1681-1692. 東京：三省堂
- 中川正之・定延利之 (編) (2003) 『言語に現れる「世間」と「世界」』 東京：くろしお出版
- 奈良林愛 (2012) 「-key hayes- とモダリティ — -keiss- の理解のために—」 『朝鮮学報』 223: 27-58.
- Narrog, H. and W. Yang (2018) Evidentiality in Japanese. In A. Aikhenvald (ed.) (2018). 709-724.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』 東京：くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法 3 第5部アスペクト 第6部テンス第7部肯否』 東京：くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 東京：ひつじ書房
- 小田勝 (2015) 『実例詳解 古典文法総覧』 東京：和泉書院
- 岡本牧子・氏原庸子 (2006) 『聞いておぼえる関西 (大阪) 弁入門』 真田信治 (監修) 東京：ひつじ書房
- 奥真裕 (2019) 「トルコ語の情報構造と名詞述語文」 『語学研究所論集』 24: 183-187.
- 定延利之 (2006) 「心内情報の帰属と管理 —現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について—」 中川正之・定延利之 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界」』 167-192. 東京：くろしお出版
- 定延利之 (2014) 「第1章 「発見」と「ミラティブ」の間 —なぜ通言語的研究と交わるのか—」 定延他 (2014) 所収
- 定延利之 (編著)・小柳智一・渋谷勝己・井上優・A. マルチュコフ (2014) 『日本語学と通言語的研究との対話 テンス・アスペクト・ムード研究を通して』 東京：くろしお出版
- 定延利之・A. マルチュコフ (2006) 「エビデンシャルリティと現代日本語の「ている」構文」 中川・定延 (編) (2003) に所収：153-166.
- 斎藤泉実 (2008) 『青森県八戸市方言の文末詞』 平成20年度秋田大学教育文化学部国際言語文化課程日本・アジア文化専修卒業研究
- 真田信治 (2002) 『方言の日本地図 ことばの旅』 東京：講談社
- 佐藤暢治 (2016) 「保安語の記述をめぐる諸問題 —積石山方言を中心に—」 「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」 2016年第1回研究会レジュメ
- 渋谷勝己 (1999) 「文末詞「ケ」—三つの体系における対照研究—」 『近代語研究』 10.
- Slobin, D. and A. Aksu (1982) Tense, aspect and modality in the use of Turkish evidential. In Hopper. P. (ed.) *Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics*. 185-200. Amsterdam: Benjamins.
- Sohn, Ho-min (2018) Evidentiality in Korean. In A. Aikhenvald (ed.) (2018). 693-708.
- Song, Jaemog (2020) Ch. 15. Evidentiality in Korean. In Lee and Park (2020). 412-444.
- 杉村孝夫 (1992) 「滋賀県方言」 平山他 (編著) (1992) に所収：195-200.
- 高見あずさ (2010) 「愛知県尾張方言における終助詞の記述的研究 —「ンダッテ」を中心に—」 『東京外国語大学記述言語学論集 思言』 6: 95-102.
- 高田祥司 (2004) 「岩手県遠野方言の非動詞的述語及び否定のテンス —〈過去〉の場合における「一ケ」の使用を中心に—」 『日本語文法』 4-2: 103-119.

- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 東京：くろしお出版
- Traugott, E. C. (1982) From propositional to textual and expressive meanings: Some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In *Perspectives on Historical Linguistics* [Current Issues in Linguistic Theory 24], Winfred P. Lehmann & Yakov Malkiel (eds), 245–271. Amsterdam: John Benjamins.
- 梅野由香里 (2011) 「完了相を標示するテイタと証拠性表現との関連性」『日本語学会 第143回大会予稿集』 日本語学会. 202-207.
- Widmer, M. and F. Zúñiga. (2017) Egophoricity, involvement, and semantic roles in Tibeto-Burman languages. *Open Linguistics*. vol.3(1), 419-441.
- Willett, T. (1988) A Cross-linguistic Survey of the Grammaticalization of Evidentiality. *Studies in Language*. 12-1: 51-97.
- Woodbury, A. C. (1986) Interaction of tense and evidentiality: a study of Sherpa and English, in Chafe and Nichols (eds.) (1986), 188-203.
- 山口幸洋 (1968) 「静岡県方言の過去表現について」『国語学』 75: 63-74
- 山口幸洋 (1987) 『静岡県の方言』 静岡：静岡新聞社
- 吉田雅昭 (2009) 「青森県津軽方言地域における文末・接続表現「キャ」の用法」『文芸研究』 167. 76-89.
- 吉田妙子 (2012) 『日本語動詞テ形のアスペクト』 京都：晃洋書房
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 編 (1993) 『朝鮮語辞典』 東京・ソウル：日本・小学館 韓国・金星出版社共同編集

A Contrastive Study on Evidentiality
with Special Reference to the Languages of Northeast Asia

Shinjiro KAZAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

Even descriptions of the same language often differ in which form as evidentiality they regard, depending on the description. On the other hand, it is common for a description to treat a form that seems to be closely related to evidentiality under a different grammatical category. From a contrastive perspective, this paper deals extensively with indirect evidentiality and its related forms, and reconsiders the semantic scope and characteristics of “(indirect) evidentiality” in the languages of the following region and its relationship with other grammatical categories. I show that the evidential form emerges from the perfect aspect at the left domain of the verbal complex, develops fully as an inflexional tense-cum-form, and then transitions historically to a specialized individual modal meaning as a clitic at the right domain of the verbal complex.

The following languages are covered in this paper: Turkish (Turkic), Khalkha Mongolian (Mongolic), Nanai (Tungusic), Korean, Old Japanese, Tanegashima dialect of Japanese, Tohoku dialect of Japanese, Nagano and Shizuoka dialects of Japanese, Kinki dialect of Japanese, North Ryukyuan, South Ryukyuan, and Common Japanese.

In conclusion, firstly I propose the hypothesis that the form of indirect evidentiality changes historically as follows.

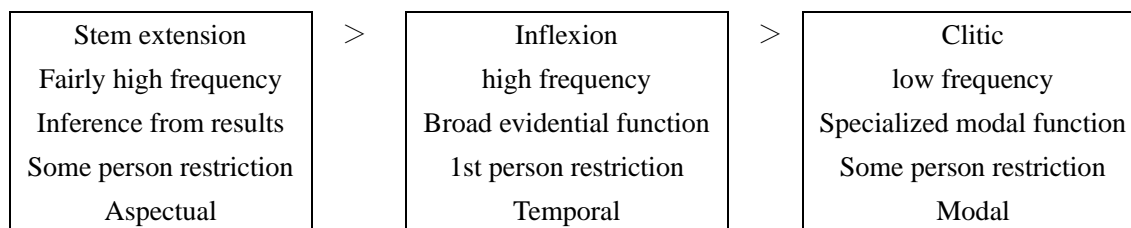


Fig. 1: Evidentiary development and transition

Secondly I propose that the various indirect evidentials discussed in this paper be considered as a combination of “-Observation” at the “Time of the action” and “Recognition/Report” at the “Time of the utterance”.

Table 2: Correspondence between various indirect evidentiary definitions and functions

[Time of action]	[Time of utterance]	Function	Language and form ex.
-Observation	Recognition of results	Inference from results	<i>keri</i> in old Japanese, <i>-mlş</i> in Turkish
-Observation	Recognition from reasoning	Inference from reasoning	<i>keri</i> in old Japanese, <i>-mlş</i> in Turkish
-Observation	Recognition by hearsay	Hearsay	<i>keri</i> in old Japanese, <i>-mlş</i> in Turkish
-Observation	Direct recognition	Mirativity	<i>keri</i> in old Japanese, <i>-mlş</i> in Turkish
+Observation > Oblivion	Recognizing anew	Remembering	stative predicate <i>-ta</i> in Japanese
+Observation > Oblivion	Checking with someone else	Confirmation	<i>-kke?</i> in Japanese
+Observation (several times) > Oblivion	Recognizing anew	Reminiscence	<i>-kke</i> in Japanese
+Observation	Reporting to others	Report on recent events	<i>-te-</i> in Korean, <i>-kkja</i> and <i>-kke</i> in Tohoku dialect

(かざま・しんじろう kazamas@tufs.ac.jp)